

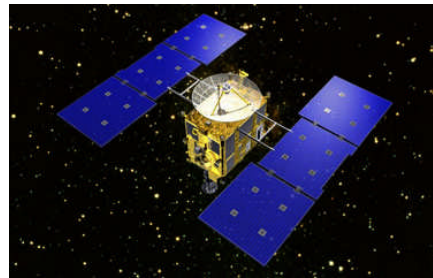
イトカワとはやぶさ

みなさん、「イトカワ」って知っていますか？

宇宙のお話です。火星と木星の間に小さな星が沢山あります。小惑星っていいです。地球から約3億km離れた宇宙の空間の小惑星のひとつに「イトカワ」という名前の星があります。日本のロケットの技術を開発した「糸川英夫」博士の名前がついています。イトカワは、長さが330mぐらいですので、ちょうど東京タワーを横にふくらまして、「ころり」としたぐらいの大きさです。



さて「はやぶさ」を知っていますか？宇宙を調べるロケット探査機です。この探査機「はやぶさ」は、広い大きな宇宙の中で東京タワー程度の大きさのイトカワにたどり着いてその写真を撮影するだけでなく、着陸して表面の石をカプセルに取り込み、地球にまで戻ってくるという大変な使命をうけました。今から7年前の2005年5月に鹿児島県から、打ち上げられました。1年生はまだ生まれていない子がほとんど、2年生も生まれたばかりのときの打ち上げですから、大変前の話ですね。はやぶさは無事にイトカワにたどり着き、写真をとったりしました。でも故障があって上手に石をとれなかったかもしれません。このあとははやぶさはイトカワを飛び立って地球を目指しました。この帰りの旅も大変でした。故障を繰り返したり半年間も通信不能に連絡ができない状態になったり、4基のエンジン全部が止まったこともありましたが、やっと1基が回復しました。



そして7年間も宇宙空間を旅し、仕事を終えて先週の13日ついに地球に戻ってきました。そういう「はやぶさ」の物語は、人にたとえれば、途中「けが」をしたり、「迷子」になったりしながら、地球の「親」の思いを必死に受けて、手と足をケガして、一本の足だけで、予定よりも3年間も時間がかかった7年間の旅を成功させ、やっとの思いで帰ってきたということになります。その「はやぶさ」は、地球にたどりついたら、イトカワの石が入っている可能性のある大事なカプセルだけを地上に届け、自分は大気圏突入の空気の摩擦で燃え尽きてしまいました。



この話から校長先生は科学技術のすごさに驚くとともに故障しながらも遠い故郷地球をめざしてやっとたどり着き、使命を果たしたはやぶさに思いを馳せます。「自分は疲れていても、人のために尽くすことはとても尊いこと」。最後に流れ星となって燃え尽きた探査機「はやぶさ」の物語は、日本だけでなく全世界の人々を感動の渦に巻き込みました。自分は大変でも人のために尽くすことの大切さをあらためて感じました。実に難しいことですが、こういう生き方をみんながしたら、世の中はみんながとても楽しく暮らせることでしょう。

※イラストは漫画家里中満智子氏からJAXAへ届けられた「帰ってくるはやぶさ」への応援イラスト